

ある。先ほどの例に関して言えば、“Do you like watching movies?” という質問にも、「理解できない時は、理解できないと表明すべし」というのが英語的発想である。質問した人をほったらかしにして、2分も3分も他人に依存して返事を引き延ばすことの方が、不適切なのである。

コミュニケーションの中心は「質問する」「意見を述べる」「提案する」「主張する」「正当化する」「反論する」「批判する」などの対人行動である。したがって中学生に“Excuse me.”や“May I ~?”、“Could you ~?”、“I beg your pardon?”、“Cathy, this is my friend Emi. Emi, this is my host mother Cathy.”などの表現を教える時には、その表現で行動できるように教える必要がある。実際、海外ホームステイで中高大生を引率していて、自分のホストマザーを街頭で出会った友人に紹介する行動が取れる学生は非常に少ないのである。行動を取るためには、個人として自分の信念に基づいて決断する自己の形成が必要である。つまり単にオウムのように空疎な言語を発するのではなく、語るべき信念・内実を持った自己を育てることが必要である。授業で用いる、安全だが少し勇気のいるコミュニケーション活動での成功体験によって、そうした自己は形成されてゆく。1つの英語表現を学ぶことは、新しい思考や行動との出会い、自己の思考や行動の振り返り、新しい自己の伸張につながるものでなくてはならない。

D. 英語コミュニケーション活動はなぜ社会性を育てるのが

おとなしくまじめだが社会性に乏しい少年が、人間関係の処理に窮して、殺人などの極端な解決法に走ってしまう、こうした事件が最近の日本に多発している。こうした事件に共通するのは、問題の少年が犯行に走るまでは、周囲の誰にも悩みを相談していないという点である。本来ならば少年は誰かに愚痴るなり相談するなりして、多少なりとも激情を発散し、周囲からの参考意見などを得て、犯罪に走らずにすんでいるはずである。こうした極端な事例の裾野には、その何百倍もの社会性未成熟者が存在する。彼らは自分の立場や都合を安全に自己主張できないために周囲に対して不適応を起こし、周囲の都合や迷惑を推し量ることができないために周囲からうとまれ、共感性が育っていないために他人の立場に立って考えることができない。日々大勢の人々とすれ違いながら、本人は窓も出口もないコンクリートの箱に密閉

された状態で、犯行に突き進んでしまう。

科学技術の加速度的進歩により、今後ますます人間の労働は機械とコンピュータに取って代わられてゆけだろう。こうした流れの中で、ますます人間に要求されてくるのは、他人との利害を調整し、敵対を友好へと変えることのできる社会性と、これまで誰も思いつかなかったものを作り出す創造性である。社会性は、言語と非常に密接に結びついた資質である。言語コミュニケーションなくして社会性はありえないし、社会性の伸張なくして言語コミュニケーションの伸張はありえない。その意味で、本項では英語コミュニケーションがどのようにに社会性の育成に貢献しうるかを論じたい。

1. mind と heart の区別

Mind と heart は日本語では共に「心」と訳されるが、英語では mind は「知性・理性の宿る心」、heart は「喜怒哀楽などの感情の宿る心」と区別されている(『ジーニアス英和辞典』)。さらに、英語文化では mind は頭に宿り、heart は胸に宿るとされている。英語文化では、この両者を区別して振る舞える大人に育てることが、教育の大きな目標の1つとされている。たとえば学校の職員会議で、来年の修学旅行の候補地を議論しているとしよう。会議の目的は、みんなで知恵を出し合って、最も良い答に到達することであるから、これは mind の働きである。仮に自分が出した提案に誰かが反論したとしても、それはより良い答に達するための mind の貢献であり、自分という人間に対する攻撃ではない。理性的に考えて、その反論が理にかなったものであれば、こちらもそれを受け入れるだけの話である。もしもここで、反論されたことを heart で受け止め、感情的に反撃したり不機嫌を表明したとしたら、その人はより良い答に到達するための共同作業を妨害したことになる、mind と heart を区別できない幼稚な人物と判断される。CNN News や ABC News で、キャスターが数人の政治家を招いて、質問に次ぐ質問をたたみかけて、政治家を追いつめて詰めている場面をよく見かける。政治家はタジタジとなりながらも、決して怒ったりせず、むしろジョークなど交えて冷静さを保った応答をしている。ひょっとしたら腹の中は怒りで煮えくり返っているかもしれないが、ともかく mind の勝負に heart を混入させないのが文化的建前なのである。これの最たるものがアメリカ大統領選挙の公開討論であり、もしもここでどちらかの候補が怒りに駆られて感情的に相手のをの

しまったとしたら、その候補は大衆の支持を失ってしまうのだ。
もちろん、英米人が四六時中 heart を滅却した mind 一辺倒の生活をして
いるわけではない。ブライベートなつきあいでは、共感や情意を優先したコ
ミュニケーションを取っている。また、会議や授業、仕事などの mind 中心
のコミュニケーションが、歯に衣を着せぬ批判と反論ばかりのギスギスした
やりとりになっているわけでもない。むしろ婉曲表現や丁寧表現を多用し
て、相手の体面を傷つけぬよう配慮しながら反論している(加藤, 2004; 東,
1994; 脇山, 1990; 鶴田他, 1988)。また『会議英語』(大杉, 1980)を読めば、
英語が公式の場でどれだけ礼儀を重んじた言葉づかいをしているかがわか
る。

現在の日本語のコミュニケーションの不成立状況を見ると、この mind と
heart の区別がことさらに重要に思われる。今日の子供たちの友達関係は、他
の子と異なることを極端に恐れて、ひたすら大勢に盲従する傾向があるとい
う。一見仲良く談笑しているように見えるが、実はみな本心を隠して同調し
ているにすぎず、本当の自分を明らかにしたら、友達から見捨てられるので
はないかと恐れているという。これでは、間違った時は相手を正したり、互
いに育て合ってゆくことはできない。つまり、今日の子供たちのつきあいは
とことん heart 一辺倒になっている。ぜひとも mind と heart の区別を訓練す
る必要があるが、この訓練は上手に行わないと heart を傷つけ、新たないじ
めや不登校の原因にもなりかねない。

実は英語授業で mind と heart の区別を訓練するのは、日本語で行うより
も楽に安全に行える。なぜなら、ここには外国語使用による fictitious な雰
囲気があり、さらに英語力向上という大義名分を利用して生徒の心理的抵抗
を弱められるからだ。このように、英語授業が実は日本語コミュニケーション
にも貢献する可能性は大いにある。後述のディベート (p. 166) や、チェー
ン・レター (p. 141) はこうした安全な雰囲気の中で、mind と heart の区別
を教えるのに適した方法である。

2. We agree to disagree の関係

“We agree to disagree.” とは、英語の交渉のマナーを象徴する表現である。
「私とあなたは意見や利害が一致しませんが、一致しないということに関して
私もあなたも同意見です」という意味である。十分に質問し合って、互いの

一致点と不一致点を明確にし、そのちがいを容認しながら、なおも友好的関
係を保とうという平和の知恵である。

それに対して、従来の日本語のコミュニケーションは、“We pretend to
agree.” であろう。ここでは、十分な質問追究はなされず、互いの不一致点
は明確にされないまま話が進められる。たとえば次の会話をみてみよう。

〈会話例 1〉

A: 「会社の業績が低迷しているこんな時期に、重役そろって海外視察旅
行とはいかがなものでしょうか」
B: 「いろいろご意見はおありと思いますが、ここはよろしくご理解くだ
さい」

ここで、A は海外視察旅行に異論を唱えているのだが、“I disagree to the
plan.” といった明白な反対を避け、「いかがなものか」(“What do you
think?”) という、あなたまたまかせの疑問文を発している。なぜ「いかがなもの
かと思う」のか、理由も明確に述べず、また相手にしっかりと答弁も要求
していない。それに対して B も、海外視察旅行が必要な理由を述べておら
ず、また旅行を積極的に肯定しようともせず、ただ「ご理解ください」とい
うあいまいなお願いをしているにすぎない。「いろいろご意見」とはどのよ
うな意見か、「ご理解」するのは何をどうご理解するのか、といったあいま
いさのために、B の答弁はほとんど意味をなしていない。もしも、両者が本
当に互いの考えを理解しようとするならば、次のような会話になるだろう。

〈会話例 2〉

A: 「会社の業績が低迷しているこんな時期に、重役がそろって海外視察
旅行をすることには私は反対です。その理由は、海外視察旅行とは名
ばかりで本当は物見遊山の観光旅行であり、経費の無駄使いだからで
す。重役はそんな観光旅行をしている暇があったら、その時間を会社
の経営建て直しに振り向けるべきです」

B: 「たしかに過去には海外視察が物見遊山だったことはあります。しか
し今回はハイテク機器の先進的工場を視察することが中心の旅行であ
り、今後の当社の主力製品を考える上で非常に重要な機会です。です
からこれはお金の無駄使いどころか、経営再建のために重役として必
要な任務です」

上記会話例 2 の下線部を見ていただきたい。英文パラグラフ構成のルール

によればおのずとこのような主張と根拠が必要となる。英語を学習していて、“We agree to disagree.”の姿勢が身につくのは、英語の論述構成の中に会話例1のようなあいまいな雰囲気的の和合を許さない要素があり、それを学習するからである。英語の段落では、まず全体のメッセージの骨子を伝えるtopic sentenceを置き、supportでそれを根拠づけることが要求される。さらに、topic sentenceで予告した命題を、途中で心変わりすることなく最後に貫くことが要求される。たとえば“I think school uniforms should be abolished.”という命題で話し始めたならば、途中で“Nevertheless I want my children to wear a school uniform.”などといった方向転換は許されず、制服廃止論をとことん展開しなければならぬ。これはライティングにおいてもスピーキングにおいても共通である。このように主張と根拠をしっかりと提示するので、英語のやりとりにおいては相手との一致点・相違点が明白になる。さらに、英文には理由や根拠、賛成や反対を表明する接続語句がよく使われ、それを学習することによってcriticalに発信し、受信する態度が身につく。

ただし、上記は論述の段階で言えることであり、発想の段階ではもう1つ考慮しなければならないことがある。それは、日本の日常生活において、理由を問いただしたり相手に反論したりする機会が非常に少ないということである。そのため生徒は、発想段階で相手の意見に同調する傾向が強い反面、理由をただしたり反論するようなcriticalなことを好まない。筆者は大学英作文の授業で、この傾向の根深さを実感することがある。

英作文のライティング課題の1つとして、「新聞から投書を1つ選び、それに対するあなたの考えを投書にして書きなさい」を与えた。元投書は英字新聞から探すのが望ましいが、日本語新聞のものを自分で英訳してもよいとした。驚いたのは、元投書が何語であるにかかわらず、学生の論調が100パーセント元投書への賛成論だったことである。しかも、その中の多くは、新しい視点を何ら貢献しておらず、元投書と同じ見解を繰り返したにすぎなかった。

そこで筆者は2年前から、「元投書に反論を書きなさい」という課題を与えることにした。その理由は、反論するために元投書の内容をより深く理解しなければならず、また反論を書く方がより学生の論理構成力を要求すると考えたからである。予想したとおり、この反論課題は学生をかなり苦しめた

ようだが、学生が最も困ったのは、反論したくなるような投書が日本語新聞にはなかなか見つからないことであった。

筆者が中日、朝日、毎日新聞の投書欄と、The Japan Timesの投書欄を比較してみたところ、The Japan Timesには挑戦的な(provoking)投書がたびたび載っており、反論を書くのに好材料が豊富に見つけられた。一方、日本語新聞の投書欄に載っているのは、大多数の読者の共感を呼ぶような無難な投書が主流を占めている。そのため、学生は投書探しにかなり手間取ったのである。

“We agree to disagree.”を前提とし、相手の発言に鋭く突っ込みを入れ、自分の主張の正当性をたたみかけてくる英語コミュニケーションに、disagreeすることを回避する日本文化の中で育った生徒がどう参加できるのか、これが日本の英語教育の課題である。本当のコミュニケーション能力を養おうとしたら、これは避けて通れない課題であり、また日本の人間教育の大きな課題である。

中嶋のチェーン・レターの実践(p. 141)はこの点で非常に貴重な方向を示している。チェーン・レターは中学生同士が相手の意見にさかんに反論する活動であるが、これを体験した中学生は「スカッとした」と述べており、このクラスからはいじめが減ったとも報告されている。

3. 言葉で自分の考えをきちんと伝える姿勢を育てる

「つくば言語技術教室」を主宰する三森ゆりか氏(1996)は、日本人が外国人と交渉できる外国語力を身につけるためには、まず日本語で「言葉を略さないで最後まできちんと自分の考えを伝える」(1996, p. 93)姿勢を身につける必要があると強調する。氏の言語技術教室での指導は、まさにそのための対話型訓練である。筆者はこの対話手法が英語コミュニケーション活動の質的向上に大いに役立つと考える。たとえば、次のような対話は英語に直して行えば中学3年程度でも可能であるし、動員される知力という点では大人にも役に立つchallengingなものである。

設定「これから答える答えは、全て「嫌い」にして下さい。」
(えーっ、嘘ーっなどの反応あり。)
問「あなたは外で遊ぶことが好きですか。」

答 「ぼくは、外で遊ぶことが嫌いです。」

問 「どうしてですか。」

答 「ぼく、本当は外で遊ぶことが好きなんです。嘘でもいいの?」

問 「かまいません。嫌いだしたらどう答えればいいか、考えてみましょう。」

答 「どうしてかというと、外で遊ぶと疲れて大好きな勉強ができなくなるからです。」

(「えーっ、嘘ばっかり!」と椰櫨の声があちこちから上がる。)

問 「すごい! 論理的な答えですね。」 (三森, 1996, pp. 69-70)

三森氏は日本人が、言葉を省略して相手に察してもらおうとする甘えに依存した身内言葉を、一般社会に持ち出してしまっていると指摘し、それが海外でいかに通じないかの例として、次のような逸話を紹介する。

日本人の女子学生が、ドイツのある家庭で台所へ行き、その家の主婦に「お腹がすいた。」と言ったときり食卓に座り込み、何かが出てくるのをじっと待っていた、というのだ。むろん、ドイツ人の主婦は女子学生の求めるところがわからず、何も出てこなかったという。出てこないどころか、主婦は女子学生の失礼な物言いに、腹を立てたという。(1996, p. 93)

三森氏は、こうした言葉の使い方が人間の思考能力を鈍らせるばかりでなく、とことんたみかけるように質問してくる欧米人を相手にした時、日本人にとって極めて不利な印象を相手に持たれる恐れがあると指摘する。

三森氏は日本語教育において、自分の考えを言葉できちんと伝える力を養成することを手がけている。同様のことは英語授業においても心がける必要がある。生徒が1人の独立したSELFとして、相手の考えを正確に深く理解し、自分の考えを言葉を尽くして説明する姿勢の育成は、英語コミュニケーション活動で非常にやり組みやすい領域である。それは何でもいかに英語をやりとりしていれば良いという姿勢ではない。自分と相手はちがって当然という立場に立って、相手を追及し、相手から追及されるタイプのコミュニケーション活動を取り入れることが必要である。そうした活動の典型例は後述のディベート (p. 166) や Strategic Interaction (p. 201) で扱うが、中学英語でできる次のような意見表明は日頃の授業でも駆使できるようにしたい。

〈相手との意見のちがいを前提とした表現〉

Do you agree?

What do you think?

In my opinion, ~.

Do you really think so?

I don't think so.

I don't quite agree with you.

You may be right, but ~.

〈相手を追及する strategy〉

I am not quite clear. Could you please explain it?

Could you give us some examples?

Why do you think so?

What evidence do you have (to support your idea)?

Is it a fact, or is it your opinion?

4. 英語という新しい言葉で生き直す

外国語学習の大きな喜びの1つは、新しい言葉でコミュニケーションすることによって、新たに人生を生き直すことができることである。このことは先述の金森 (B-4) や松畑 (C) の引用にも見ることができる。

ここに、ある大学生が小さな英会話塾を回想した文がある。この学生は、むかし自分の人生のメインである学校のコミュニケーションが断絶してしまった状況の中で、この会話塾での新しい言語によるコミュニケーションが辛うじて自分を支えてくれたと回想している。

学級崩壊が絶えなかった中学時代、同級生との関係を恐れるようになってしまった自分が、英会話塾で年も文化もちがう人と、なんてことはないささやかな会話を成立させることができることで英語が好きになり、何度通じなくても順を変え語を変え、何とか意思の疎通を図ろうと自分から積極的に話しかけるようになっていった。(2004年5月、静岡大学2年生)

先ほどセクションCで、独立したSELFを育てる英語コミュニケーションの意義を説明した。実はこのことは、独立したSELFを受け入れる社会の

成長と二人三脚の関係にある。学級崩壊に苦しんだ学生も、言語表明が苦手な小学生も、英語による新しいSELFが生きようとした時に、そのSELFを受け入れる英語のコミュニティが存在したことが救いとなった。すでに流暢な日本語能力を獲得していたこの人たちにあって、なぜこれが救いだったのか?

その理由は、1つの言語によるコミュニケーションの閉塞から説明できる。本人を取り巻く人々の日本語コミュニケーションが、雰囲気的融合・自己の集団埋没一辺倒で硬直化していたため、彼らは新しいコミュニケーション手段を必要とした。それが英語という新しい言語だったのだ。新しい言語でコミュニケーションすることは、人と人との新しい関わり方を生む。同じクラスメートと関わりながら、生徒は日本語コミュニケーションと英語コミュニケーションでは、それぞれ異なる関わり方を持ち、それが社会性の幅を広げてゆくのである。時に「日本人同士が英語を話すことには意味がない」という意見があるが、実はこのように、2つのチャネルで話すことによって日本人同士のコミュニケーションも、より発展するのである。

Savignon (2001) は、韓国の作家ミア・ユンの、同様の体験を紹介している。ミア・ユンは英語で小説を書く時に、「まるで新しいドレスを着るような」自由を感じると語っている。

On the other hand, learners may discover a new freedom of self-expression in their new language. When asked what it is like to write in English, a language that is not her native tongue, the Korean writer Mia Yun, author of *House of the Winds* (1998), replied that it was “like putting on a new dress.” Writing in English made her feel fresh, see herself in a new way, offered her freedom to experiment. When expressing themselves in a new language, writers are not the only ones to experience the feeling of “putting on a new dress.” “My Language Is Me” calls for recognition and respect for the individual personality of the learner. (Savignon, 2001, p. 21)

静岡文化芸術大学講師で五輪柔道銀メダリストの溝口紀子氏(2005)が、外国語使用について同様の体験を書いておられる。氏は何度かフランスを訪れて柔道のフランス・ナショナルチームを指導されているが、その際、日本語で会話するよりもフランス語で会話をする時の方が、選手の話をよく聞いて

いる自分に気づくという。「選手というのは面白いもので、話をよく聞いてあげると、気持ちが安定するようです」と述べておられる部分は、単なるコミュニケーションを超えた関係性としてのコミュニケーションを適確に表現していると思う。

5. Only One 同士のめぐり合い

先ほど C-1 で筆者は、コミュニケーション活動が、個人としての独立した意思決定のできる人物に育ちゆくための、becoming a person のプロセス(Rogers)だと述べた。それと並行してコミュニケーション活動は、こうしたSELF同士が互いを受け入れる出合いの場を育ててゆくと述べた。実はこのことは、コミュニケーション活動の成否に大きく関わっている事柄である。なぜなら、生徒同士が集団に個を埋没した状態では、相手の言うことと自分の言うことは同じであり、お互いにコミュニケーションする必要などないからである。独立したSELFとして存在しない人間同士の間に、面白く傾聴に値するコミュニケーションは成立しない。そして、これは日本の教室の英語コミュニケーション活動が沈滞する大きな原因の1つなのである。

たとえば7月に教室で生徒に“What are you planning to do in the summer vacation?”と尋ねたとする。生徒の返事がいつの間にか“I am planning to watch TV.”など、1つの陳腐な答に集約されていってしまうことがある。大学生の英作文においても然りである。‘My Happy Memory’というテーマで書かせると、大半の学生が高校の部活動で苦勞し、最後の大会で全力を尽くして頑張った思い出か、海外ホームステイでホストファミリーに優しくされた感激を書いている。それほどに、日本の生徒の発話・作文は無意識的に無難な主流に流されやすい。これを放っておくと、教室は集団埋没の文化に染まり、コミュニケーション活動の産物はどこを切っても同じ金太郎飴のように退屈極まりないものに堕してしまふ。これは、決して日本の生徒に個性がないわけではない。個性を埋没させようとする力学のために、個性を自覚していないのである。

英語コミュニケーション活動では、教師が「あなたのコミュニケーションを大切にしない、あなたにしか言えないことを言い、あなたにしか書けないことを書きなさい」ということを生徒に強調するかどうか、成否の分かれ目となる。これは決して大それたチャレンジではない。たとえば言い換え作文